ひと

日曜市と古民家を描き70年

國松勝さん（85）

高知城の追手門から東に並ぶ「日曜市」は藩政時代から続く全国でも有数の街路市です。「市を生業とする人のたくましさ、やさしさにひかれた」といいます。

「古民家」は「市井の人たちの暮らしの気配を感じ、安心します」と。その絵は素朴で、作者の飾らない人柄がにじみます。

2022年にはこれまでの画業から73点を選んで画集を上梓。2022年度高知県出版文化賞を受賞しました。

幼い頃、実家の印刷屋を手伝う中で、絵に興味を持ちました。高知大学教育学部で絵を学び、高校の美術の教員になりました。

県内の労働組合運動のリーダーとして奮闘し、県教組や統一労組懇、県労連の委員長を歴任。多忙を極める中でも絵筆をとり続けました。スケジュールの合間を縫ってキャンバスに向かい、夜も寝ずに描いたことも。「よく時間がとれた、よく体が続いたと思います。やめんと描いてきたから、何とか作品を残せた」

「絵を描くとは、自分探し。庶民の苦しみ、平和への思いなどを共有し、みんなと一緒に生きていることを確認していく意味合いが強い。だからこそ、描き続けてこられたと思います」

小学校1年の時に、高知大空襲に遭いました。家族と離れて炎の中、一人さまよい地獄を見ました。その体験を若い人に伝えようと「詩」にしている最中です。詩集にまとめようと思っています。

文・写真　浦　準一